

Dispersive estimates for the stably stratified Boussinesq equations

高田 了 (九州大学 大学院数理学研究院)

3次元全空間において、安定成層の仮定の下で静水圧平衡からの熱対流の運動を記述する Boussinesq 方程式の初期値問題を考察する。

$$\begin{cases} \partial_t v + (v \cdot \nabla)v = \Delta v - \nabla p + \theta e_3 & t > 0, x \in \mathbb{R}^3, \\ \partial_t \theta + (v \cdot \nabla)\theta = \Delta \theta - N^2 v_3 & t > 0, x \in \mathbb{R}^3, \\ \nabla \cdot v = 0, & t \geq 0, x \in \mathbb{R}^3, \\ v(0, x) = v_0(x), \quad \theta(0, x) = \theta_0(x) & x \in \mathbb{R}^3. \end{cases} \quad (1)$$

ここで、 $v = (v_1(t, x), v_2(t, x), v_3(t, x))^T$, $p = p(t, x)$, $\theta = \theta(t, x)$ はそれぞれ流体の速度場、圧力および温度擾乱を表す未知関数であり、 $v_0 = (v_{0,1}(x), v_{0,2}(x), v_{0,3}(x))^T$, $\theta_0 = \theta_0(x)$ はそれぞれ与えられた初期速度場および初期温度擾乱である。 $N > 0$ は流体の浮力周波数に対応した定数であり、鉛直軸 $e_3 = (0, 0, 1)^T$ 方向への安定成層の強さを表す (Brunt-Väisälä 周波数と呼ばれる)。

本講演では、安定成層による歪対称な低階項 $(\theta e_3, -N^2 v_3)^T$ が有する分散性の解析、およびその初期値問題への応用を考察する。特に、方程式系 (1) の時間大域的適切性を保証する初期温度擾乱 θ_0 のノルムが、浮力周波数 N に比例して大きく取れることを証明する。

未知関数を $u = (v, \theta/N)^T$ とし、Helmholtz 射影作用素 \mathbb{P} および安定成層による低階項に対応した歪対称定数行列 J を次で定義する：

$$\mathbb{P} := \left(\begin{array}{ccc|c} (\delta_{jk} + R_j R_k)_{1 \leq j, k \leq 3} & & & 0 \\ \hline & & & 1 \end{array} \right), \quad J := \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}.$$

また $\tilde{\nabla} = (\nabla, 0)^T$ とする。このとき、Helmholtz 射影作用素 \mathbb{P} を作用させることで、方程式系 (1) は次の形に書き換えられる：

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u + N\mathbb{P}J\mathbb{P}u + \mathbb{P}(u \cdot \tilde{\nabla})u = 0, & \tilde{\nabla} \cdot u = 0, \\ u(0, x) = u_0(x). \end{cases} \quad (2)$$

方程式系 (2) における線形作用素を $L_N := -\Delta + N\mathbb{P}J\mathbb{P}$ とする。このとき、歪対称な低階項 $-\mathbb{P}J\mathbb{P}$ の固有周波数が、

$$\sigma[-\widehat{\mathbb{P}J\mathbb{P}}] = \left\{ \pm i \frac{|\xi_h|}{|\xi|}, 0, 0 \right\}, \quad \xi_h = (\xi_1, \xi_2)^T$$

となることから、線形作用素 $-L_N$ によって生成される半群は以下の表現をもつ：

$$e^{-tL_N} u_0 = e^{t\Delta} e^{iNtp(D)} P_+ u_0 + e^{t\Delta} e^{-iNtp(D)} P_- u_0 + e^{t\Delta} P_0 u_0.$$

ここで、 P_\pm, P_0 はそれぞれ固有周波数 $\pm i|\xi_h|/|\xi|, 0$ に対応した固有射影作用素であり、 $e^{\pm iNtp(D)}$ は次で定義される Fourier 乗法作用素である：

$$e^{\pm iNtp(D)} f(x) = \int_{\mathbb{R}^3} e^{ix \cdot \xi \pm iNtp(\xi)} \widehat{f}(\xi) d\xi, \quad p(\xi) = \frac{|\xi_h|}{|\xi|}.$$

まずは $e^{\pm iNtp(D)}$ に対する時間減衰評価を考察する. 相関数 $p(\xi) = |\xi_h|/|\xi|$ が斉次 0 次であることから, Littlewood-Paley 分解とスケール変換により, 問題は周波数を局在化した以下の作用素の減衰評価に帰着される.

$$U_{\pm}(t)f(x) = \int_{\mathbb{R}^3} e^{ix \cdot \xi \pm itp(\xi)} \psi(\xi) \widehat{f}(\xi) d\xi, \quad (t, x) \in \mathbb{R}^{1+3}.$$

ここで, $\psi \in \mathcal{S}(\mathbb{R}^3)$ は $\text{supp } \psi \subset \{2^{-2} \leq |\xi| \leq 2^2\}$ かつ $\{2^{-1} \leq |\xi| \leq 2\}$ 上で $\psi(\xi) = 1$ を満たすカットオフ関数とする. $U_{\pm}(t)$ に対して以下の評価が成立する.

定理 1. ある正定数 $C = C(\psi)$ が存在して,

$$\|U_{\pm}(t)f\|_{L^\infty} \leq C(1 + |t|)^{-\frac{1}{2}} \|f\|_{L^1}$$

が全ての $t \in \mathbb{R}$ と $f \in L^1(\mathbb{R}^3)$ に対して成立する. また減衰率 $-1/2$ は最良である.

次に, 定理 1 の初期値問題への応用を考察する. 歪対称行列 $-\widehat{\mathbb{P}}\mathbb{J}\widehat{\mathbb{P}}$ に関する固有用射影 P_{\pm}, P_0 を用いて, 非圧縮性条件 $\nabla \cdot u_0 = 0$ を満たす初期値 u_0 を以下のように分解する:

$$u_0 = \mathbb{P}u_0 = P_+u_0 + P_-u_0 + P_0u_0.$$

このとき, 方程式系 (2) の時間大域的適切性に関して以下が成立する.

定理 2. $1/2 < s \leq 5/8$ とする. このとき, ある正定数 $\delta_1 = \delta_1(s), \delta_2$ が存在して,

$$\|P_+u_0\|_{\dot{H}^s} + \|P_-u_0\|_{\dot{H}^s} \leq \delta_1 N^{\frac{1}{2}(s-\frac{1}{2})}, \quad \|P_0u_0\|_{\dot{H}^{\frac{1}{2}}} \leq \delta_2 \quad (3)$$

を満たす任意の $u_0 \in \dot{H}^s(\mathbb{R}^3) \cap \dot{H}^{\frac{1}{2}}(\mathbb{R}^3)$ と $N > 0$ に対して, 方程式系 (2) の時間大域解 $u \in L^4(0, \infty; \dot{W}^{\frac{1}{2}, 3}(\mathbb{R}^3))$ が一意に存在する.

注意 3. 定理 2 における条件 (3) を元の初期値 $(v_0, \theta_0)^T$ に関して書き換えると以下のようになる:

$$\begin{aligned} \left\| (-\Delta_h)^{-\frac{1}{2}} (-\Delta)^{-\frac{1}{2}} \partial_{x_j} \partial_{x_3} v_{0,j} \right\|_{\dot{H}^s} &\leq \delta'_1 N^{\frac{1}{2}(s-\frac{1}{2})} \quad (j = 1, 2), \\ \left\| (-\Delta_h)^{\frac{1}{2}} (-\Delta)^{-\frac{1}{2}} v_{0,3} \right\|_{\dot{H}^s} &\leq \delta'_1 N^{\frac{1}{2}(s-\frac{1}{2})}, \quad \|\theta_0\|_{\dot{H}^s} \leq \delta'_1 N^{\frac{1}{2}(s-\frac{1}{2})+1}, \\ \left\| (-\Delta_h)^{-\frac{1}{2}} (\partial_{x_1} v_{0,2} - \partial_{x_2} v_{0,1}) \right\|_{\dot{H}^{\frac{1}{2}}} &\leq \delta_2. \end{aligned}$$

従って, 安定成層 $N > 0$ の強さに比例して, 時間大域的適切性を保証する初期温度擾乱 θ_0 のノルムが大きく取れることが分かる.

回転流体での研究 [1] との違いとして, 相関数 $p(\xi) = |\xi_h|/|\xi|$ が $\{2^{-2} \leq |\xi| \leq 2^2\}$ 上で微分可能でないため, $U_{\pm}(t)$ の時間減衰評価の証明において Littman の補題 [2] を直接適用出来ないことが挙げられる (回転流体の場合, 相関数は $\xi_3/|\xi| \in C^\infty(\{2^{-2} \leq |\xi| \leq 2^2\})$ となる). 本研究では, 相関数 $p(\xi) = |\xi_h|/|\xi|$ を適切に近似し, 停留位相法の小さな摂動に対する安定性を用いることで定理 1 を証明する.

本研究は Sanghyuk Lee 氏 (Seoul National University) との共同研究に基づく.

参考文献

- [1] Y. Koh, S. Lee, and R. Takada, *Dispersive estimates for the Navier-Stokes equations in the rotational framework*, Adv. Differential Equations **19** (2014), 857–878.
- [2] W. Littman, *Fourier transforms of surface-carried measures and differentiability of surface averages*, Bull. Amer. Math. Soc. **69** (1963), 766–770.